

北陸発! 国際協力中学生・高校生 エッセイコンテスト 2019年度全国表彰作品

2019年度の国際協力中学生・高校生エッセイコンテストでは、中学生の部27,320点、高校生の部28,141点ものご応募があり、北陸3県から2人の全国表彰者が誕生しました。本号では、中学生の部で優秀賞を受賞された福井県越前市立南越中学校3年(当時)高島凜花さん、高校生の部で国際協力特別賞を受賞された富山国際大学付属高等学校3年(当時)藤井千聖さんの作品をご紹介します。

中学生の部
優秀賞

「力になりたい」

福井県越前市立南越中学校3年(当時)
高島 凜花 さん

「うわっ、あの子汚い水を飲んでる！」

小学四年生だった私は、教科書に掲載されていた写真を見て衝撃を受けた。先生から世界には学校にも行けず、家族のための毎日何時間もかけて水を汲みに行く子どもたちがいると教わり、とても驚いた。そして苦労して汲んだ水を飲んで死んでしまう子どももいると聞き、とても悲しい気持ちになった。

そこで私は、その夏の自由研究で「水の浄化」について研究した。汚い水をきれいにできれば、死んでしまう子どもたちを救うことができると思ったからだ。石や砂、活性炭を使って水を何とか透明にすることが出来たが、それでも過した

だけでは水に含まれた細菌まで除去することが出来ず、沸騰して熱処理をしても、結局飲み水を作ることができなかった。その実験以降、どうしたら発展途上国や後進国の子どもたちを助けることが出来るだろうと考え続けている。

私の願いは、世の中から「発展途上国」や「後進国」という言葉が無くなることだ。この言葉がなくなったその先には、平和や協調の世界が広がっていると信じているからだ。そのためにはまず何が一番大事なことかと考えたときに、それは「安心」と「安全」だと思った。つまり命の保証が最優先だ。多くの子どもたちは、汚れた水に潜む細菌で病気に感染し、最悪死に至る。安心して水が飲めない生活など想像できるだろうか。命を落とすかもしれないとわかっていても、それでも生きるためにその水を飲まなければならないというのは、あまりにも残酷だと思った。

私は小学六年生のときに、児童会長として校内でエコキャップ運動を実施した。ペットボトルのキャップを集めてリサイクル資源として売却し、その収益で発展途上国の子ども

たちのためにワクチンを購入するという取り組みだ。私はこの取り組みで、自分の行動を少し変えることで、誰かの力になれるということを実感した。そして安全な水を作り出すことはできなかったが、違う形で彼らの安全や安心を応援出来たことがとても嬉しかった。きっとまだ他にできることはあるはずだ。

私たちは修学旅行でユニセフハウスを訪問し、世界には水問題だけでなく、さまざまな苦境に立たされている子どもたちが大勢いることを知った。「子どもの権利条約」のことは知らなかったが、これが定められたということは、さまざまな権利が今もなお侵されている現実があるということだと悟った。

発展途上国で井戸を掘ることはできないが、世界で起こっている問題を学校で話し合おうとみんなに提案することは、私にもできると思った。まずは世界で起こっている問題を知ってもらい、関心を持ってもらいたいと思った。そこで私は生徒会活動を通じて、全校生徒に伝えることにした。何か

できることはないかと考えることが、自分の行動を変える一歩だと思う。その小さな一歩は、きっと彼らの力になるはずだと私は信じていた。



高島さんの作品は
こちらからも
ご覧いただけます



高校生の部
国際協力
特別賞

「ボランティアの心」

富山国際大学付属高等学校3年(当時)
藤井 千聖 さん

私は去年の八月から約十ヶ月間、アメリカ留学をしていた。街の中をホストファミリーとドライブしたことを覚えている。道路の中央や駐車場の端に目をやると、「お金を恵んで」と書いたボードを持つホームレスらしき人々が佇んでいた。このような場面に出くわしたら、まず彼らを疑いなさい、とホストマザーが私に忠告した。彼らの中には、ホームレスのふりをして居る人も居るからだ。

貧困層の人々に対し、社会は社会保障やボランティアといった形で彼らを支えている。しかし、アメリカでの光景を目にし、その社会の形に疑問を抱くようになった。社会には貧困層だと偽ってその立場を利用する人が存在する。だから、私はホストマザーが言ったように、支援をする前に彼らのことを疑わなくては行けない。しかし、彼らに本当にホームレスかどうかを聞くことは無駄である。どちらにしろ彼らは首を縦に振るのだ。結果、私は疑いの目を彼らに向け、何もせずに通り過ぎる。そうするうちに、私の頭に一つの考えが浮かんだ。彼らへのボランティアは無意味なのではないかと。

本来不必要な人が支援を受け、本当に必要な人への支援が薄くなるのが起こりうるのなら、一般市民が行うボランティアは悪行を助長する。本当に困っている人は一般市民に助けを求めず、政府の社会保障をあてにする筈である。政府の方ができることも多く、その規模も大きい。私が彼らにできることは何もなく、逆に何もしないことが彼らのためであると信じるようになった。

私は毎週日曜日に現地の教会に行っていた。ある日曜日、私は教会の活動の一環として、公園でホットドックをホームレスの方に配るというボランティアを行った。当日、私は教会の仲間と沢山のホットドックを作り配った。ふと、ホットドックを待つ人々の列を見みると、ホームレスの方々の他に、ランニングをしていた人、親子、学生など明らかにホームレスではない方も中に居た。私はなぜ本来私達のボランティアを必要としない人々が列に並んでいたのか不思議に思い、片付けの最中に教会の大人の方に質問した。

「ボランティアは確かに、食べ物やお金が足りていない人に渡すことだね。でも、僕らはただ物を彼らに渡すためにボランティアをしているわけじゃないんだ。ホームレスや他に社会の中で困っている人と僕は同じじゃなきゃいけないんだ。僕らが彼らと手を取って、同じ足並みで歩いていることを示さなきゃいけないんだ。そうしないと、彼らはずっと

辛い状況から抜け出せないだろう？だから、ホームレスの人達だけにホットドックを渡すっていうのは少し間違っているかな。僕らも、ホームレスの人も、散歩している人も、みんな一緒にホットドックを食べるんだ。それが、彼らの心の救いになるんだ。」

彼の言葉に私は気付かされた。ボランティアは物資の提供だけではなく、思いやりの共有。本当に彼らがホームレスかどうかなど、ボランティアでは重要ではない。ホームレスの人や自分を傷めている人、そして私など、社会の一員である人はみんな悩みと辛さを抱えている。その深刻さには差があれど、誰しもがその苦悩から脱却したい。しかし独りではその脱却は困難である。そんな時、私達はお互いに、ボランティアという形を通して、貴方は独りではない、と精神を助け合うことが大切なのだ。それがボランティアの意義であり、必要である理由だ。

私は、ホットドックを渡した時に受け取った「Thank you」という言葉をたまに思い出す。その度に、これが社会のために私ができることだという実感が湧く。これからも、他人に手を差し出すだけではなく、共に歩み出すようなボランティアを続けたい。



藤井さんの作品は
こちらからも
ご覧いただけます



2020年度「JICA国際協力中学生・高校生 エッセイコンテスト」募集要項

テーマ 「世界とつながる自分・私たちが考えること、できること」

応募締切 2020年 9月11日(金)

エッセイコンテスト
詳細はこちら

身近にある自分と世界との接点から、自分と世界とのつながりを考え、感じたこと、行動したことについて書かれた作品を期待しています。海外経験がなくても、海外から日本にきた人を通じて感じたこと、毎日のTVニュースを見て感じた世界・地球の課題なども対象になります。皆さんの作品を通じて、読んだ人も国際協力の大切な思いや考えに改めて考えるきっかけとなっています。たくさんのご応募お待ちしております。



エッセイコンテストの
ヒントを探す

